

A事業所における子宮頸がん予防啓発活動

島根大学保健管理センター
河野 美江 (Yoshie Kono)

要 約

子宮頸がんに関する啓発を目的として、A事業所に勤務する女性に対し講演会を行った。講演前に参加者にアンケートを行い、子宮頸がん検診受診状況やHPVワクチンに対する知識について調べた。アンケートに回答のあった74名(回収率93%)で、「20～30代の女性に子宮頸がんが増えていることを知っている」と答えた人は81%(59/73)、「20歳から子宮頸がん検診を受けることを勧められていることを知っている」と答えた人は68%(46/68)、「子宮頸がん予防にHPVワクチンが有効なことを知っている」と答えた人は65%(47/72)と高かったが、「子宮頸がんについて名前も病気も知っている」と答えた人は27%(20/74)と低く、子宮頸がん予防について広報などで見たことはあっても、正確な医学知識は乏しいと考えられた。「子宮頸がん検診を受診する上で、重要だと思う項目」、「HPVワクチン接種する上で重要だと思う項目」に「料金が無料、もしくは安い」を選んだ人がそれぞれ53%、66%と最も多かったことより、事業所における子宮頸がん検診の費用助成や、HPVワクチン無料化の必要性が示唆された。また子宮頸がん検診未受診者において、「子宮頸がんについて知らない」、「子宮頸がん検診の受け方がわからない」という理由を選んだ人がそれぞれ33%、29%であったことより、未受診者にとって受診方法の説明を含めた啓発活動が重要と考えられた。

I. はじめに

近年わが国において、若年者の子宮頸がん発症が増加している。子宮頸がんの原因はヒト・パピローマウイルス(HPV)感染であることが明らかになり、平成17年に厚生労働省は検診受診対象を20歳以上と勧告した¹⁾。しかし、現在の20代女性はHPV感染について性教育を受けていない年代であり、発症の高危険群であるにもかかわらず、検診受診率は約20%と欧米に比して極めて低い。また2009年12月にHPVに対する予防ワクチンが発売になったが、2009年に我々が大学1年生274名に対して行った調査で「子宮頸がんの原因がHPVである」ことを「よく知っている」と答えた学生は6.2%、「名前だけ知っている」と答えた学生は20.8%と、正確な知識は不十分であった²⁾。子宮頸がん検診受診率やHPVワクチン接種率を向上させるためには、正確な医学情報の提供が必要不可欠である。

今回、子宮頸がんに関する啓発を目的として、事業所に勤務する女性に対し講演会を行った。講

演前に参加者にアンケートを行い、子宮頸がん検診受診状況やHPVワクチンに対する知識について調べたので報告する。

II. 対象と方法

講演会のお知らせは、A事業所の健康管理室よりロッカー室のポスター掲示や健康だよりで行った。講演会は2010年10月、11月に計4回開催され、参加人数は計80名であった。参加者のうちアンケートに回答のあった74名(回収率93%)を調査対象とした。アンケート用紙の内容は、先行研究を参考にした³⁾。

方法はアンケートを講演の開始前に配布し、記入してもらった。これらの調査はプライバシーに十分配慮し、研究目的以外に用いることはないことを説明し、無記名で回収した。

III. 結 果

1. 属 性

年齢構成は、20代4名(6%)、30代16名

(22%), 40代41名 (55%), 50代12名 (16%), 無回答1名であった(図1)。

婚姻状況は, 未婚16名 (22%), 結婚50名 (68%), 離婚・死別7名 (9%), 無回答1名であった。

2. 子宮頸がんについて

1) 「あなたは, 子宮頸がんについて知っていますか?」という問いに対して, 「子宮頸がんという名前も病気も知っている」は27% (20/74), 「子宮頸がんという名前だけ知っているが, 病気については知らない」は73% (54/74)であった。「何も知らない」と答えた人はいなかった(図2)。「名前も病気も知っている」と答えた人のうち, 知識を得た方法は医療機関14名, テレビ番組3名, 本・雑誌2名, 知人1名であった。

2) 「あなたは20~30歳代の女性に, 子宮頸がんが増えていることを知っていますか?」という問いに対して, 「知っている」は81% (59/73), 「知らない」は19% (14/73)であった。

3) 「子宮頸がんの原因はHPV (ヒト・パピロマ・ウイルス) であることを知っていますか?」という問いに対して, 「よく知っている」は14% (10/73), 「名前は知っているが, どのような病気を起こすウイルスかは知らない」は52% (38/73), 「名前もどのような病気を起こすウイルスかも知らない」は34% (25/73)であった。

3. 子宮頸がん検診について

1) 「セックスの経験のある女性は, 20歳から子宮頸がん検診を受けることを勧められていることを知っていますか?」という問いに対して, 「知っている」は68% (46/68), 「知らない」は32% (22/68)であった(図3)。

2) 「あなたが子宮頸がん検診を受診する上で, 重要だと思う項目はどれですか?」(2つ選択)という問いに対して, 「料金が無料, もしくは安い」が53%, 「土, 日などの休日や夜間に受診できる」は35%, 「プライバシーの守られたクリニックでできる」は27%, 「女性医師が担当する」は24%, 「診察の前に, ゆっくり子宮頸がんに関する説明をしてもらえる」は18%, 「自分で出来るキット」が14%, 「病院に行かなくても, 学校や家の近くでできる」は12%, 「妊婦検診や月経不順などで産婦人科受診の際に併せてできる」は7%であつた。

た。「大学祭やイベントなどの行事に併せてできる」を選んだ人はなかった(図4)。

4. 子宮頸がん検診受診について

1) 「あなたはセックスの経験がありますか?」という問いに対して「あり」は95% (70/74), 「なし」は4% (3/74), 無回答1% (1/74)であった。「あり」と答えた人のうち, 「子宮頸がん検診の受診」については, 「受けたことはない, わからない」は39% (27/70), 「2年以上前に受けたことがある」は17% (12/70), 「過去2年以内に受けた」は44% (31/70)であった(図5)。

「受けたことがない, わからない」と答えた人に, 受けない理由を1つ選んでもらったところ,

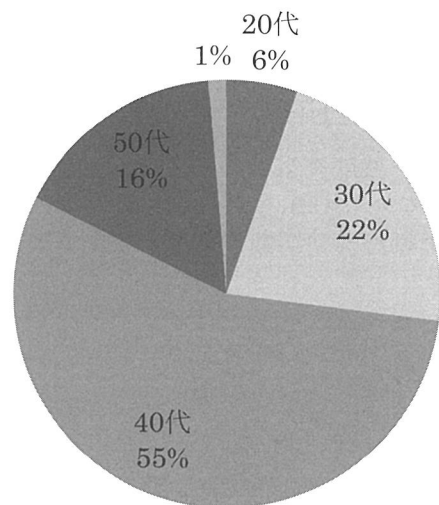


図1. 年齢構成

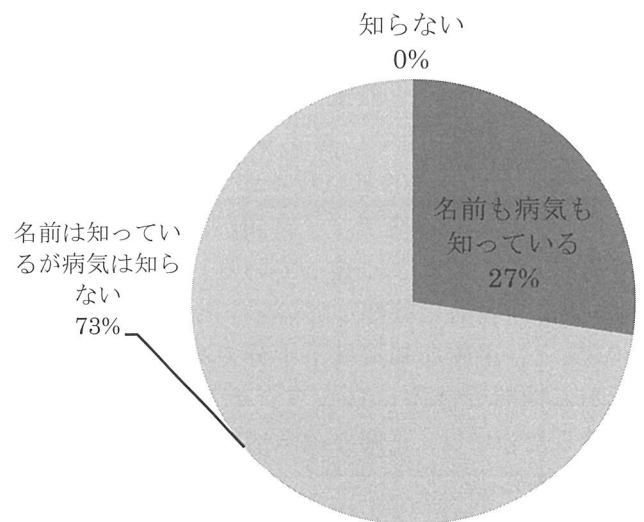


図2. 子宮頸がんについて知っているか

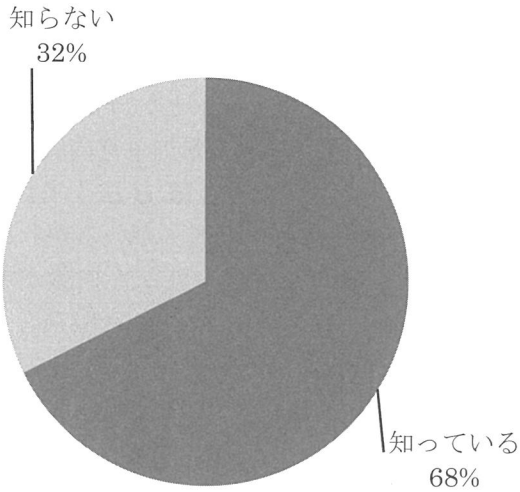


図3. 20歳から子宮頸がん検診を受けることを知っているか

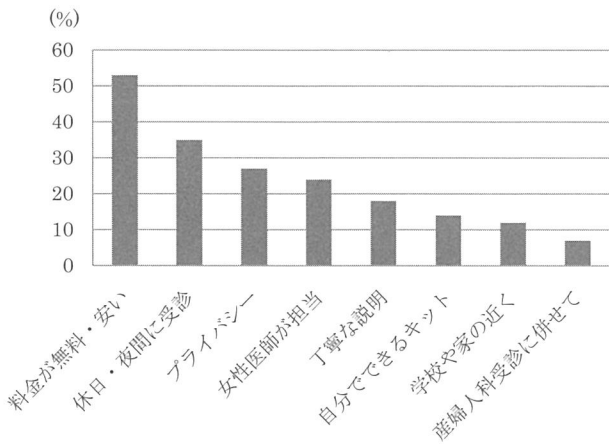


図4. 子宮頸がん検診受診で重要な項目

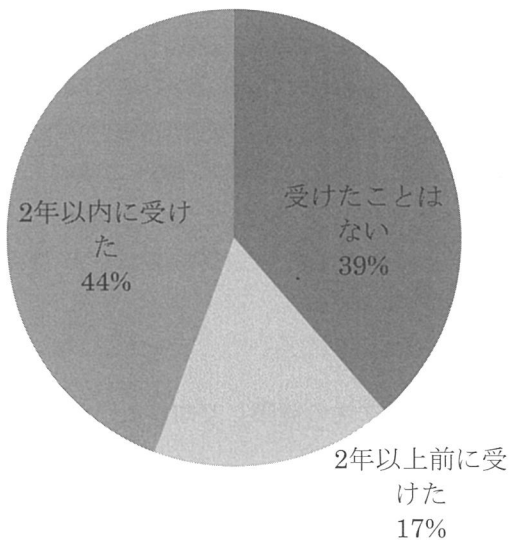


図5. 子宮頸がん検診を受けたか

「子宮頸がんについて知らない」は33% (8/24), 「子宮頸がん検診の受け方がわからない」は29% (7/24), 「お金がかかる」は17% (4/24)名, 「面倒くさい」は8% (2/24), 「子宮頸がん検診と子宮がん検診の違いがわからない」, 「恥ずかしい」, 「時間がない」がそれぞれ4% (1/24)であった。

2) 「あなたはHPV検査を受けたことがありますか?」という問いに対して「あり」は31% (22/70), 「なし」は43% (30/70), 「わからない」は26% (18/70)であった。HPV検査を受けたことのある人のうち73% (16/22)は, 2年以内に子宮頸がん検診も受けていた。

5. HPVワクチンについて

1) 「あなたは子宮頸がん予防にHPVワクチンが有効なことを知っていますか?」という問いに対して「知っている」は65% (47/72), 「知らない」は35% (25/72)であった(図6)。

2) 「あなたはHPVワクチン接種を希望しますか?」という問いに対して, 「すでに受けた」はなく, 「希望する」は22% (11/51), 「詳しい説明を聞いて考える」は52% (27/51), 「希望しない」は25% (13/51)であった。

3) 「あなた(あなたの娘さん)が, HPVワクチン接種する上で重要だと思う項目はどれですか?」(2つ選択)という問いに対して, 「料金が無料, もしくは安い」は66% (49/74), 「学校や職場で集団接種できる」は28% (21/74), 「女性医師が担当する」は26% (19/74), 「婦人科だけでなく, 内科や小児科で受けられる」は24% (18/74), 「接種の前に, ゆっくりワクチンに関する説明をしてもらえる」は22% (16/74), 「プライバシーの守られたクリニックでできる」は18% (13/74)であった(図7)。

6. 女性の健康について

1) 「あなたは産婦人科を受診することに, 抵抗がありますか?」という問いに対して, 「あり」は39% (27/70), 「なし」は61% (43/70)であった(図8)。

2) 「あなたは産婦人科で気軽に健康相談が受けられたらいいと思いますか?」という問いに対して「思う」, 「やや思う」は68名 (97%), 「あま

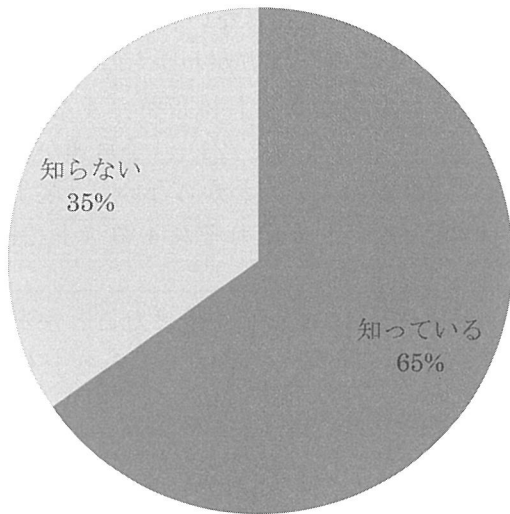


図6. HPVワクチンが有効と知っているか

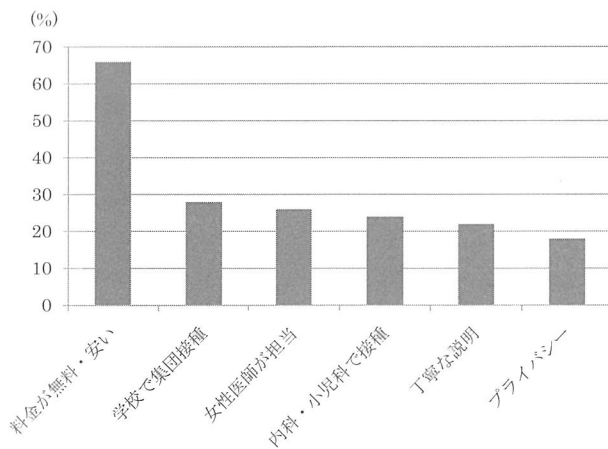


図7. HPVワクチン接種で重要な項目

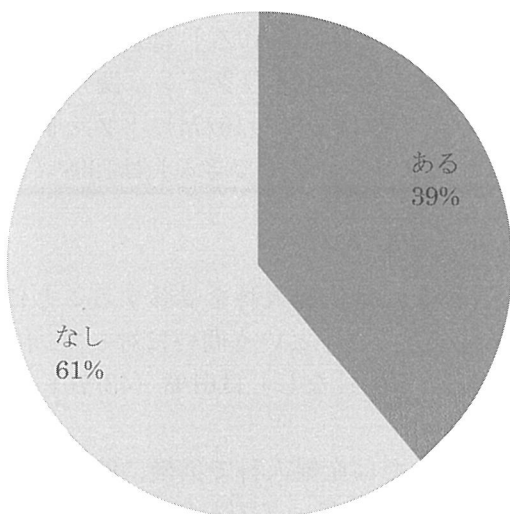


図8. 産婦人科を受診することに抵抗があるか

り思わない」は2名(3%)であった。

3)「あなたが『女性の健康』で、知りたい情報は何ですか？」(2つ選択)という問いに対して、「女性特有の病気(子宮筋腫, 子宮内膜症, 子宮がんなど)の情報や治療方法」は78%(58/74), 「どの病院にどの専門医がいるか」は55%(41/74), 「子宮がん検診や乳がん検診ができる病院や集団検診の情報」は38%(28/74), 「避妊や性感染症の情報」は5%(4/74), 「妊娠に関する情報」は4%(3/74), 「月経前の不調や摂食障害の情報」は3%(2/74)であった(図9)。

4)「あなたは情報を知りたい時に、何を参考にしますか？」(2つ選択)という問いに対して、「インターネット」は49%(36/74), 「テレビ番組」・「本・雑誌」はそれぞれ47%(35/74), 「新聞・広報」は16%(12/74), 「パンフレット」は14%(10/74), 「講演会」は11%(8/74), その他「人」は1%(1/74)であった。

5)「アンケートでお気づきになられたこと, ご希望などありましたら、何でもお書き下さい」という欄に「娘が学校でこのことについて聞いて帰っており, とても大切なことだと最近知りました。娘が学校で聞いて友達と気軽に話をしているので, 私たちも職場で気軽に話ができる環境があるといいと思います」という意見があった。

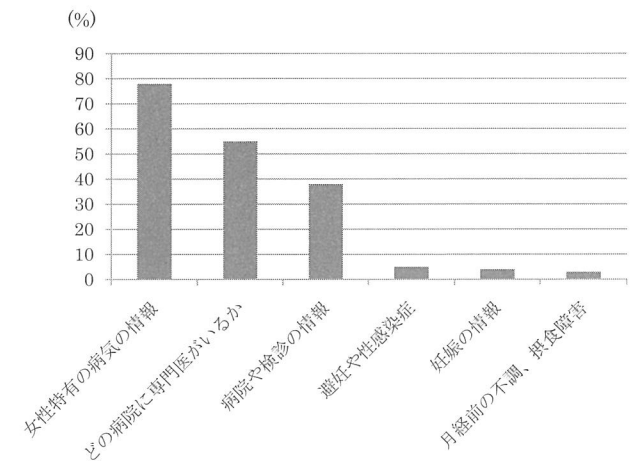


図9. 「女性の健康」で知りたい情報

IV. 考 察

今回調査を行ったA事業所は, 若い女性が多い事業所である。子宮頸がんが20~30歳代の女性に

増加していることより、健康管理室のスタッフが20代女性に個別に声をかけ20代の参加者を増やす工夫をしたが、自由参加でもあり20代の参加者は少なかった。20代女性は独身も多く、同じ職場の年配の女性と一緒に講演会には出にくいと考えられるため、20代女性に参加してもらうためには、テーマを20～30歳代向けにしほり出席者を限定する必要性が示唆された。

対象者における子宮頸がん検診受診率は2年以内に受けた人が44%と、他の報告^{4, 5)}に比べると高かった。しかし子宮頸がんの知識については、「20～30代の女性に子宮頸がんが増えていることを知っている」と答えた人は81%、「20歳から子宮頸がん検診を受けることを勧められていることを知っている」と答えた人は68%、「子宮頸がん予防にHPVワクチンが有効なことを知っている」と答えた人は65%と高かったが、「子宮頸がんについて名前も病気も知っている」と答えた人は27%と低く、子宮頸がん予防について広報などで見たことはあっても、正確な医学知識は乏しいと考えられた。

子宮頸がん検診は、初回受診者における子宮頸部細胞診異常の発見率が高いため、未受診者の受診を増やすことが最も有効、と言われている⁶⁾。今回子宮頸がん検診未受診者において、「子宮頸がんについて知らない」、「子宮頸がん検診の受け方がわからない」という理由を選んだ人がそれぞれ33%、29%であったことより、未受診者にとっては受診方法の説明を含めた啓発活動が必要であり、今回の講演は受診の動機づけとして重要と考えられた。

「子宮頸がん検診を受診する上で、重要だと思う項目」「HPVワクチン接種する上で重要だと思う項目」は、「料金が無料、もしくは安い」を選んだ人がそれぞれ53%、66%と最も多かった。2008年に松浦らが行った企業125事業所の調査⁷⁾では、子宮頸がん検診を実施している企業は53社(42%)で、実施していない企業は72社(58%)であった、と報告している。現在企業で働く20～30歳代の女性は、HPVワクチンを受けられなかった年代で、検診の意義が大きいので、国は費用対効果を示して実施していない企業への働きかけが必

要である。A事業所では子宮頸がん検診の費用助成を行っており、受診率向上につながっていると考えられる。企業においては積極的に子宮頸がん検診の受診勧奨を行うとともに、子宮頸がん検診費用の助成を行うことの重要性が示唆された。また、HPVワクチンについては、2010年度より女子中高生に対する公費負担が始まったが、2011年3月にはワクチン不足になるほど需要が急増した。ワクチン無料化は接種率向上効果が大きいことより、今後も無料化継続が必要である。

97%の女性が産婦人科で気軽に健康相談が受けられることを希望しているにもかかわらず、39%が産婦人科受診に抵抗がある、と答えていた。女性にとって産婦人科受診は抵抗が大きく、さらに島根県では現在産婦人科医師不足のため、医療機関でゆっくり健康相談を受けることは難しい。今回の講演では子宮頸がんのみならず、乳がん、更年期障害についても説明したが、このように事業所において女性の健康教育を行うことは女性のニーズに合致しており、今後も継続する必要性が示唆された。

健康情報を知りたい時に参考にする方法としては、インターネットと答えた人が49%と最も多かった。知りたい健康情報としては、「女性特有の病気の情報や治療方法」が78%、「どの病院にどの専門医がいるか」が55%、「子宮がん検診や乳がん検診ができる病院や集団検診の情報」が38%など、医学書には記載されていない口コミ的な情報を希望する人が多かった。私は現在子宮頸がん検診情報サイト「子宮を守ろう」を作成し、島根県内の子宮頸がん検診の情報などを掲載しており⁸⁾、今回も講演の参加者全員に、カードを配布した(図10)。今後インターネットによる健康情

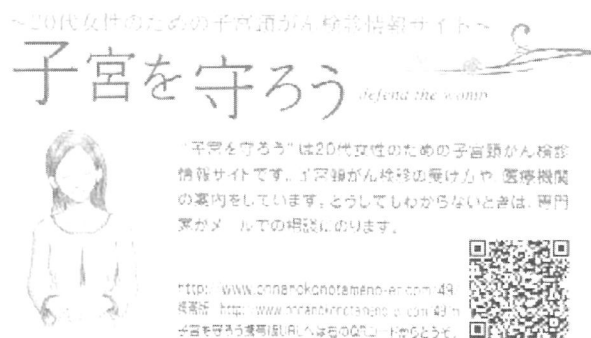


図10. 子宮頸がん検診情報サイト

報はますます必要になると考えられるが、木原らは行動変容につながる予防介入には、個人の置かれた社会環境を重視することと、介入効果の評価が不可欠である⁹⁾と述べている。今後健康教育のためのホームページの活用について、効果の評価を行い、必要に応じて改善していくことが必要と考えられた。

V. 結 語

事業所において子宮頸がんに関する講演会とアンケートを行った。子宮頸がん検診受診率やHPVワクチン接種率を向上させるためには、正確な医学情報の提供が必要不可欠であり、今後も子宮頸がんの予防啓発活動を継続する必要性が示唆された。

今回の調査は、科研費（22500630）の助成を受けたものである。

今回の講演、調査にご協力いただいた、株式会社出雲村田製作所 健康管理室 原田恵子先生、スタッフの皆様に、心よりお礼を申し上げます。

参考文献

- 1) 厚生労働省：「がん予防重点健康教育及びがん検診実施のための指針」の一部改正について。2004
- 2) 河野美江, 小海志津子：大学1年生における子宮がんに対するアンケート調査. 島根医学. 2009, 29(4), 22-25
- 3) 子宮頸がんから女性を守るための研究会：子宮頸がん検診に関する調査報告書. 2008
- 4) 伊藤良彌：子宮がん検診（グリーンルーム）の実施成績. 東京都予防医学協会年報. 2010, 39, 166-168
- 5) 祖父江友孝：がん検診の適切な方法とその評価法の確立に関する研究. 厚生労働省がん研究助成金による研究報告集. 2006, 38-42
- 6) 岩成 治, 倉田和巳, 加藤一郎, 他：地域がん登録で検証した子宮頸がん検診の問題点と改革案－細胞診・HPVテスト併用検診の必要性－. 島根医学. 2006, 26(4), 240-250
- 7) 松浦佑介, 蜂須賀徹, 柏村正道, 他：日本における子宮頸がん検診の現状と課題. 産業医科大学雑誌. 2009, 31(2), 181-193
- 8) 河野美江：子宮を守ろう～20代女性のための子宮頸がん検診情報サイト <http://www.onnankonotameno-er.com/49/>
- 9) 木原雅子, Kyung-Hee Choi, 木原正博：HIV性感染の予防介入への戦略. Modern Physician. 2002, 22(3), 370-373